

既治療非小細胞肺癌に対するcarboplatin, paclitaxelをベースとした化学療法の後方視的検討

信州大学内科学第一教室

後藤憲彦,立石一成,小林信光,牛木淳人,漆畑一寿,安尾将法,山本洋,花岡正幸

背景

- 既治療非小細胞肺癌に対する2次治療として現在有効性が示されているものはdocetaxel, pemetrexed, erlotinibなどの単剤療法である。
- Yohらは非小細胞肺癌の既治療例に対する後治療としてcarboplatin+paclitaxelを行った Phase II study(n=30)について、奏効率36.7%, PFS中央値5.3ヶ月, OS 9.9ヶ月と報告し、PS良好な既治療例に対して有害事象も少なく、有効な治療方法であるとしている。(T Yoh, et al. Lung Cancer 2007;58: 73-79.)
- 当科でもPS良好例に対してcarboplatinベースのプラチナダブレットによる化学療法を行ってきた。

方法

- 2011年1月から2014年9月まで当科でプラチナ製剤併用治療後に後治療としてcarboplatin+paclitaxel療法がおこなわれた40例について後方視的に検討した。

結果

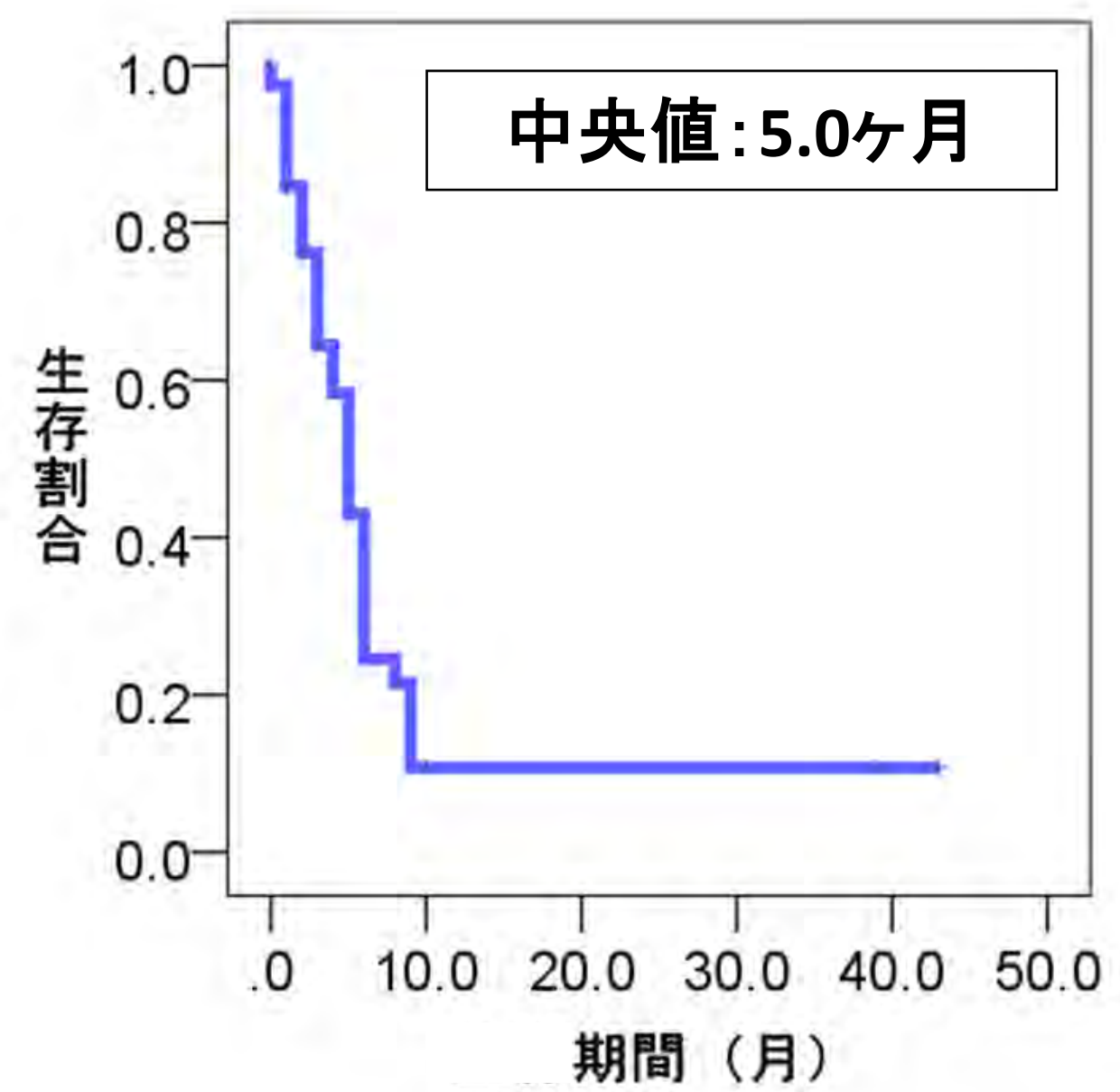
患者背景

	患者数	(%)
性別		
男性	37	(92.5%)
女性	3	(7.5%)
年齢(歳)	65 (38-78)	
組織型		
腺癌	16	(40.0%)
扁平上皮癌	19	(47.5%)
その他	5	(12.5%)
病期		
II B	1	(2.5%)
III A	3	(7.5%)
III B	6	(15.0%)
IV	20	(50.0%)
術後再発	10	(25.0%)
driver mutation		
EGFR遺伝子変異	2/16	
ALK融合遺伝子	1/9	
CBDCA+PTX 投与line		
2nd line	32	(80.0%)
3rd line	4	(10.0%)
4th line	1	(2.5%)
6th line	3	(7.5%)
performance status(PS)		
0	8	(20.0%)
1	25	(62.5%)
2	3	(7.5%)
3	4	(10.0%)

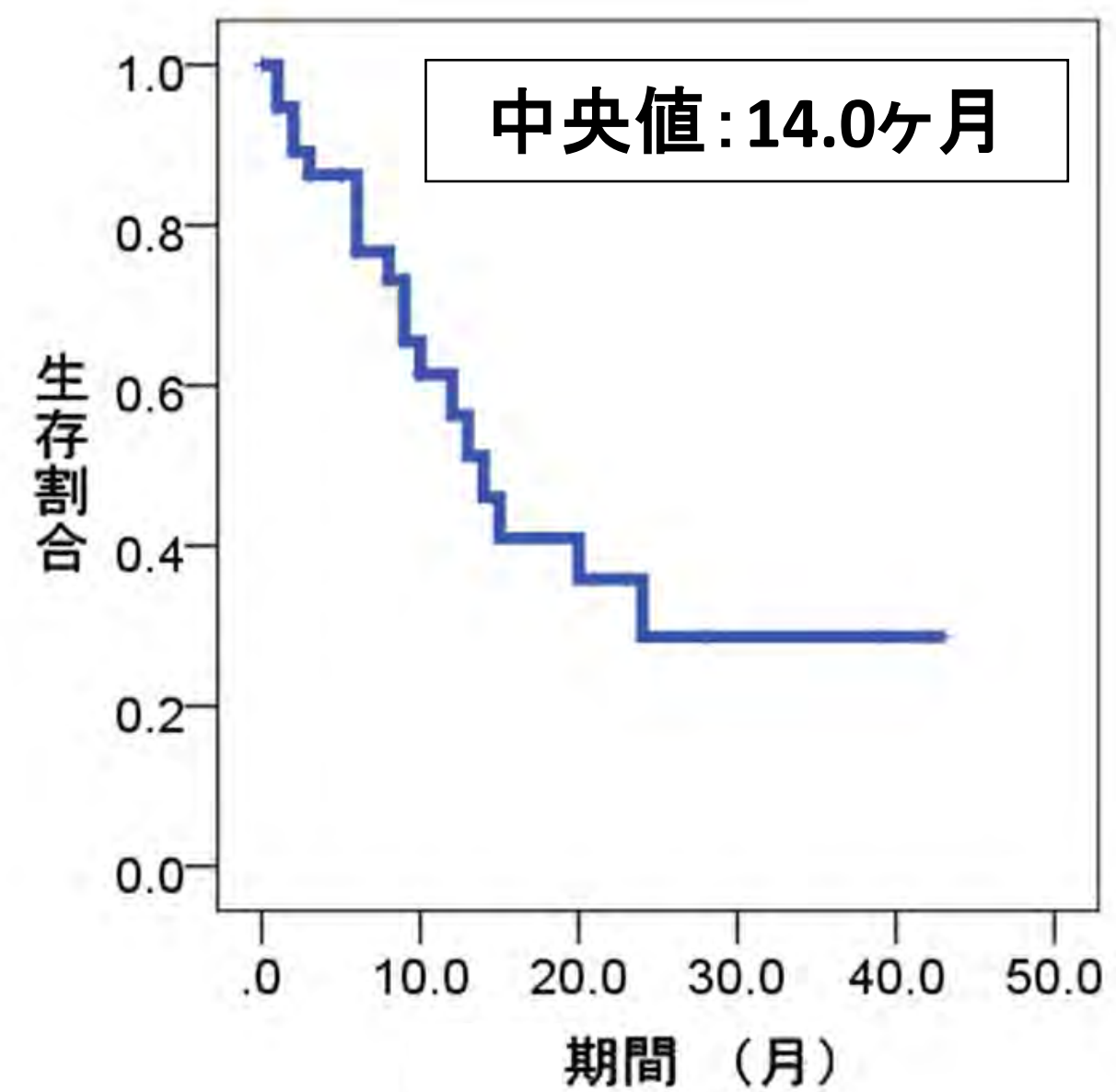
治療効果

	患者数	(%)
治療効果		
complete response (CR)	0	(0%)
partial response (PR)	11	(27.5%)
stable disease (SD)	14	(35.0%)
progressive disease (PD)	15	(37.5%)
奏効率		(27.5%)
病勢コントロール率		(62.5%)

Progression free survival



Overall survival



有害事象

	全グレード	Grade3≤
好中球減少症	18 (45.0%)	15 (37.5%)
発熱性好中球減少症	3 (7.5%)	3 (7.5%)
ヘモグロビン低下	10 (25.0%)	3 (7.5%)
血小板減少	2 (5.0%)	0 (0%)
末梢神経障害	18 (45.0%)	3 (7.5%)

考察

- 本検討でのPFSはYohらの報告と比較して、奏効率では劣るものの、PFSは同等、OSは良好であった。
- 本検討では重篤な有害事象は認めず、安全に施行できると考える。
- 本検討は後方視的な解析であり、既治療例に対するcarboplatin + paclitaxelの併用療法が生存期間の延長に関与するかは前向き試験を行う必要があると考える。

結語

- 既治療非小細胞肺癌においてcarboplatin + paclitaxelの併用が可能な症例では、同治療は選択肢となる可能性が示唆された。

日本呼吸器学会COI開示
 筆頭発表者名: 後藤 憲彦
 演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業はありません